

特集Ⅱ 追悼：鑪 幹八郎先生

半世紀にわたる鑪幹八郎先生との思い出

森 谷 寛 之

京都コラージュ療法研究所・京都文教大学名誉教授

鑪幹八郎先生とは約50年もの間、親しくしていただきました。先生の思い出は、筆者の心理臨床家としての歴史であり、日本の心理臨床、本学の設立発展の歴史と同じになります。数枚の写真を手がかりに思い出を語りたいと思う。

「出会い」

筆者が京都大学大学院工学研究科修士課程修了後、教育学研究科修士課程に入学した頃(1973年)は、先生は、すでに広島大学の教員をしておられた。当時、臨床心理学分野の大学教員は極めて少なく貴重な存在でした。河合隼雄先生(京都大学)、東山紘久先生(大阪教育大学)、そして岡田康伸先生(天理大学)ぐらいでした。そもそもアカデミズムの世界では、心理学とは実験心理学を指すことが常識でした。世間の抱く心理学イメージは、臨床心理学を指し、アカデミズムの世界とはスプリットしていた。筆者のスーパーヴァイザーだった藤井虔先生(当時、京都大学学生懇話室)が鑪先生を尊敬されていたことを思い出す。

最初に先生にお目にかかったのは、おそらく広島で開催された三大学院(広島、九州、京大)の夏休みの事例検討会の場であったと思う。その時、自己紹介に「鑪」の由来を、中国地方古来の「たたら製鉄」で説明された。かなり後、先生は熊本のご出身で、筆者がいろいろお世話になった西村洲衛男先生は同郷の後輩で、とても親しい間柄ということを知った。

筆者が博士課程の時、「チック症の大学生」

で最初の夢分析を体験した。河合先生がこの事例研究に3人の著明な先生(現象学派荻野恒一、フロイト派鑪幹八郎、ユング派樋口和彦)のコメントを企画して下さった(森谷1977)。これが最初の意味深い出会いで、樋口先生、鑪先生は夢分析の先生であった。また、これも今から考えると、因縁と言えるが、西村先生(当時、中京大学)は、筆者のイニシャルケースであるチック症の遊戯療法(森谷・桐畑1995)のコメントを書いて下さった。このコメントが縁となり、筆者の愛知医科大学就職へとつながった。この2つのチックの症例が後に、筆者の博士論文の基礎となった。この面でも樋口、鑪、西村先生は大恩人ということができる。

「臨床心理学科の創設—京都文教大学時代」



写真1

筆者は大学院修了後、当時中京大学教員の西村先生のご縁から、愛知県の新設医科大学に就職でき、そこで15年を過ごした。この期間に、多くの出会いがあり、本学の最初の学科長であ

る林昭仁先生（当時、東京工業大学学生相談室）とは産業心理臨床の分野を通じて、長年懇意にいただいていた。林先生から本学設立へお誘いの声をかけていただいた。しかし、そのすぐ前に鳴門教育大学からの声かけがあり、そちらを優先せざるを得ず、1993年に徳島に赴任し、生徒指導講座教授として5年勤務し、1998年春に本学に着任した。鳴門の生活をわずか5年で切り上げることの未練もあったが、臨床心理学科を新設することの意義を最優先した。



写真2

夢分析のコメントから20年の後になって、1998年に京都文教大学で鑑先生とご一緒することになった。先生は広島大学教授をちょうど定年退職された年にあたった。

写真1、2（1998年4月8日）は最初の学科歓迎会である。鑑先生、酒木保先生と筆者、お



写真3



写真4

よび竹口等先生の4人が新任であった。樋口和彦学長と林学科長は、待ちに待った助っ人が来た、ということでも喜んでくれたのが印象に残っている。

当時、臨床心理士で、大学運営まで経験した教授は日本でもごくわずかであった。林学科長をはじめ、多くは大学の学生相談室担当教員であった。そんな中で鑑先生が広島大学教授で、筆者が鳴門教育大学教授であった。筆者も教授経験はわずか5年しかなかった。医大では心理学教員として15年の経験があるが、ここは教授だけの教授会であった。（もっとも、その方が研究や心理臨床活動に専念できたので、とてもありがたかった。）

就任そうそう大学院のデザインをどうするのかの検討が行われた。その時にやはり先生が、中心的な役割を担われた。写真3、4は、1998年9月15-16日、関西セミナーハウスでの「大学院設立のための集まり」である。セミナーハウスは樋口学長が世話をしてくれたと記憶している。合宿をしながら将来を構想した。

大学院は2000年に開学し、9月13-16日に日本心理臨床学会第19回大会を本学で開催した（森谷2001）。写真5は、記憶があいまいになっているが、何度も大会準備のための集まりがあり、その時の写真だと記憶している。みんなとても元気そのものの写真。大会には約5600人の参加者の熱気で本学が埋まった。大学院生や



写真 5

学部生、教職員あわせて一生懸命働いてくれた。

博士課程設立時には、担当教員が3人必要であったが鑪先生と筆者しかおらず、そこで筆者の医科大精神科時代の精神科医で助教授であった遠藤みどり先生（当時、島根医科大学）にお願いし、設立できた。松田真理子さんが無事に博士号を取得され、ここに学部から博士課程まで一貫した臨床心理学科が誕生した。

「学会活動と国家資格化」

先生は大学運営だけではなく、研究でもしっかりと着実に成果を挙げられていた。そして広く学会の場でも活躍された。日本心理臨床学会理事長を務められ、学会賞も受賞された。

筆者は2003年11月から日本心理臨床学会第8期常任理事として、理事長の鑪先生、また事務局長の滝口俊子先生らと学会活動をご一緒することができた。そして国家資格制度成立までの長期にわたり、その歴史的推移を間近でつぶさに観察するという得がたい機会を得た。そこで筆者はその経験を後世に伝えるつもりでできるだけ文章化した（森谷2006, 2009a, b, 2011, 2012a, b, 2014, 2016）。

写真6は、2004年9月7日の日本心理臨床学会常任理事会（鑪、岡昌之、奥村茉莉子、栗原和彦、滝口俊子、富永良喜、東山紘久、丸山千秋、森谷寛之）と第23回大会大会準備委員

長の詫摩武俊先生（東京国際大学）で、翌日始まる大会準備の最終的な打合せの場である。この頃、学会は多難の時代であった。2004年7月、財団法人「日本学会事務センター」が諸学会からの預かり金約16億円を流用し、倒産。諸学会がパニックになった。また、大きくなりすぎた日本心理臨床学会はどここの大学も大会を引き受けなかった。学会事務センターが倒産し、大会を準備してくれる組織が消えた。窮余の策として、2005年度第24回大会は、理事主催で、大会長鑪、事務局局長滝口、準備委員長森谷で京都国際会館で開催することとなった（森谷2005）。院生さんに大いに助けられた。

さらに突然大きな課題が出てきた。2005年2月に医療心理師国家資格化のニュースで、常任理事会は、大会準備どころか資格問題に振り回された状態となった。

国家資格化のいきさつについては広くご承知のことと思うが、最初は、河合隼雄先生がご健在で河合先生が中心にまとまって対処してきた。「二資格一法案」として臨床心理士の国家資格が実現するはずであった。しかし、2005年8月、医療団体の反対で頓挫に追い込まれた。さらに悪いことが重なるもので2006年8月突如、河合先生が意識不明となり、そのまま2007年7月にご逝去された。

その国家資格化を再び進めるための音頭を鑪



写真 6



写真7

先生が推進された。写真7（2006年10月9日、東京大学安田講堂、筆者撮影）の「心理専門職に関する国際シンポジウム」はそのターニングポイントになった大きな集まりで、国際的視野から、また、精神科医療団体、日本心理学諸学会連合も加わり、全体としてまとまりつつ資格化が推進されるようになった。

オーストリアのジグムント・フロイト大学学長のDr.Alfred Pritzの言葉が印象に残っている。津川（2006）もそれを記録している。

「心理学と医学は違った学問であり、お互いを尊敬し合う関係であるが、疾患や障害をもっているクライアントと共にする職業なので、サイコジストと医師はお互いがやり取りする関係でもある。オーストリアでサイコジストの法律を作る際には、医学的な問題が疑われたらサイコジストは医師に紹介する（refer）という一文を法律に入れただけでなく、心理的な（とくに情緒的な）問題が疑われる場合は、医師はサイコジストに紹介しなければならないという一文も同等に入っている。これによってお互いが専門職として機能している。」

公認心理師法制定過程において、「医師の指示問題」が多くの疑念を生み、資格化が進まなかったいきさつがある。残念ながら未解決のままに法制化がなされたが、将来的には平等な地位を確立する方向に進めることは、Dr.Pritzの



写真8

言葉通り必須のことである。

「お別れ」

大学卒業式などの懇親会は、京都駅や伏見桃山付近が会場になる。先生のお住まいは伏見区。筆者は大学の駐車場まで帰る。途中まで先生とタクシーでご一緒する。その時が、二人きりで先生を一番身近に感じるひとときであった。その時の大学運営や国家資格問題などあれこれ話し合った。先生はととても穏やかでやさしかった。

先生が学長を退かれ、広島に戻られ、筆者も定年退職の身で、お会いする機会もなくなった。広島でもコラージュ療法が流布しているので、ぜひ筆者を呼びたいといわれていたが、果たせないままになった。最後のやり取りは、メールであった。

今年2021年4月9日に、名古屋市で西村洲衛男先生が主宰していた檀溪心理相談室より、西村先生ご逝去のはがきが届いた。先生は、すでに1年も前（昨年2020年6月23日）にガンで亡くなっていた。なんとその知らせが1年後に届いた。前代未聞の不思議なことであった。それにはコロナ禍という事情もあったとは思いますが、1年間も誰も知らなかったとは。筆者は、すぐに鑑先生にメールでお知らせした。やはり鑑先生も、西村先生の最期をご存知なかった。

2日後に返事があった。

「鑑です。西村君のご逝去のご連絡をありがとうございました。一昨年に学会であったきりでした。児童期から近くの地域で育った仲なので、さびしい思いです。研究では少し離れたましたが、熊本大学から京都大学へ、私の後をついてきてくれた人でした。西村君の奥様は大学院時代の研究者の仲間で、親戚のようでした。私も痛で、そろそろ出立の用意をする時期になってしまいました。東山君も往ってしまい、いよいよ寂しくなっていますね。あなたは健康の方はどうですか、お大事になさってください。

それではまた、連絡ありがとうございました。」

西村先生は、鑑先生の後を追って熊本から同じ京都大学へ入ったのに、なぜかユング派とフロイト派に別れた。西村先生は河合先生へ傾き、箱庭療法に夢中で、筆者も東海箱庭療法研究会で多くを学んだ。後に筆者が「コラージュ療法」を発想できたのは、西村先生との出会いからであろうと思う。また、コラージュ作品の発達の変化を読み取るには、鑑先生らの紹介されたエリクソンの発達理論が基礎になっている。

このメールで、筆者は鑑先生のガンを知った。それからわずか、ひと月足らずの5月7日のご逝去であった。お二人の魂は学派を超えて、昔の遊び仲間として連れ立って、旅立たれたのではないだろうか。

激動の時代を導きいただきありがとうございました。ご冥福をお祈りします。

また、ここに紹介した写真にある多くの先生（越智浩二郎、河合隼雄、清水佐保子、詫摩武俊、林昭仁、東山紘久、樋口和彦、平野節雄）がすでに亡くなられています。この場をお借りしてあわせてご冥福をお祈りします。合掌

文献

- 森谷寛之, 桐畑香代子 1975 Gilles de la Tourette's tic 症児のプレイセラピー—母親のカウンセリングと並行して— 臨床心理事例研究—京都大学教育学部心理教育相談室紀要—, 2, 101-116.
- 森谷寛之 1977 宗教的青年の場合—夢分析を中心に— 臨床心理事例研究—京都大学教育学部心理教育相談室紀要—, 4, 1-8.
- 森谷寛之 2001 心理臨床学会第19回大会を主催して— 臨床心理研究—心理臨床センター紀要 3, 105-108.
- 森谷寛之 2005 多難な時こそ、必要な集い— 日本心理臨床学会会報 17号, 1.
- 森谷寛之 2006 最初の心理臨床家フロイトからの資格問題に対するメッセージ—「非医師による精神分析の問題—ある中立的な立場にある人との問答」— (フロイト 1926, 1927) 日本臨床心理士会雑誌 48(4), 80-84.
- 森谷寛之 2009a 「提言：医療領域に従事する『職能心理士（医療心理）』の国家資格法制の確立を」に対する意見—心理学ワールドの協力体制の構築に向けて— 臨床心理研究—京都文教大学心理臨床センター紀要 11, 33-48.
- 森谷寛之 2009b 討論：心理学界のアンブレラ— 遊戯療法学研究 8(1), 80-86.
- 森谷寛之 2011 心理臨床家の国家資格への歩み—私の30年の歴史を振り返りつつ— 遊戯療法学研究 10(1), 130-140.
- 森谷寛之 2012a 臨床心理士の国家資格を考えるⅡ— 現代日本における「素人による精神分析の問題」— 遊戯療法学研究 11-1, 136-149.
- 森谷寛之 2012b 心理学諸学会連合理事会に向けてのカリキュラム案についての意見— 遊戯療法学研究 11-1, 154-157.
- 森谷寛之 2014 巻頭言：大詰めを迎えた国家資格遊戯療法ニュースレター第32号, 1
- 森谷寛之 2016 「公認心理師法」の成立をめぐる—その経過と歴史的意義について— 産業精神保健 24(4), 413-417.
- 津川律子 2006 ヨーロッパの現状について— Dr. Alfred Pritz の講演を聴いて— 日本心理臨床学会報 22, 3.